

自然を語る会報告

10月20日（土）10時から12時

市民ボランティアセンター

参加者 9名

ポール・ブルックス著 『レイチェル・カーソン』 第20章「嵐」

担当：柳澤 征克さん

20章「嵐」は、『沈黙の春』が雑誌「New Yorker」に掲載されてから単行本として出版された頃の、全米に巻き起こったセンセーションとそれに対してカーソンがどのように向き合ってきたかについて綴られている。

どのような反響があったか、媒体別に、一つ一つ丁寧にプリントで紹介された。本に反対の企業、団体の意見、一般の新聞や雑誌の対応、市民の反応はどうだったかなど。とてもよく整理されていて、わかりやすかった。それにしても本に対する攻撃は凄まじいものであった。新聞、雑誌、広告、TVCMなどあらゆるメディアが利用され、「沈黙の春」に対抗して農薬のない恐ろしい空想の世界を語ったいくつかの印刷物が発行されるなど、「New Yorker」に掲載された直後から1年も経たない間に、あの手この手で継続的に攻撃が行われていたことにあらためて驚かされた。ただそのような状況においてもカーソンは決して論争に加わるようなことはしなかったようだ。

戦後、DDTを頭からかけられて、髪が真っ白になった話、学校でシラミのある子がDDTをかけられたのだけれど、DDTがかかっているところにシラミがぞろぞろと出てきて気持ち悪かった話など、生々しい体験も披露された。そのころは、DDTは良いものだとかばかり思っていて、DDTの歌なども歌わされていたとのこと。当時はDDTはノミを駆逐するという良い役割をしていたのだが、その役割が終わってもDDTをどんどん使い続けた、それも絨毯爆撃のように広くばらまき始めたことが問題なのではないか、経済が主導権を握ると、そのような暴走になってしまう、これからは経済と生命のバランスを意識していくことが大切、などと話が出た。その後DDTは各国で使用禁止になったのだが、近年またDDT使用を推奨する動きが出ている。今ではもっと分解性の良い、自然を痛めつけない薬品もあるのにもかかわらずDDTを使うのは、DDTが安価だからなのだそうだ。これからもこれらの動きを注意して見ていかなくてはならない。

（文責：小川）